雨水管理を日本が主導

国際規格化戦略　海外展開で有利な規格へ

雨水管理の国際規格策定を日本が主導することがわかった。推進工法など日本の民間企業が持つ雨水・浸水対策技術が海外展開で、有利となるよう戦略的に規格を策定する。9日には、関係者で国内の対応方針を議論した。

雨水管理の国際規格は、昨年日本が「雨水管理～都市部における雨水システムの計画に係わるガイドライン～」として新規提案し、今年1月26日に認められたもの。

その後、上下水道の運営に関する規格を定める「飲料水および下水サービス活動に関する検討委員会（ISO／TC224）」の下にWG11が設置され、今後はここで規格案が議論される。WG11の議長は国土技術総合政策研究所の榊原隆・下水道研究部下水道研究官が務める。

規格は日本主導で作成する。雨水管理に関して、施設整備や合流改善、降雨強度などの考え方を規格内容に反映していく見通し。

国際規格として発行されれば、海外の雨水対策関連事業を発注する際に、入札要件として活用することが予測される

国土交通省の下水道革新的技術実証事業では、平成26年度採択事業でICTを活用した浸水対策技術の実証を行っているほか、来年度にはレーダーを用いた局所的な集中豪雨の予測技術や浸水予測技術などの実証を行う予定になっている。

また、インドネシア・ジャカルタの雨水放流きょ整備に日本の推進工法が採用されている。

日本主導で規格化を進めることで、こうした技術が海外展開で他国に比べ有利となることを狙う。

ISO／TC224は全11のWGを抱える。2007年には、▽ユーザ・サービスの評価および向上に関するガイドライン（ISO24510）▽下水事業のマネジメントおよび下水サービスの評価に関するガイドライン（ISO24511）▽飲料水事業のマネジメントおよび飲料水サービスの評価に関するガイドライン（ISO24512）――の三つ国際規格を発行している。

今回の雨水管理の国際規格については、2012年に開催された神戸下水道展で開かれたISOワークショップで規格化に向けた各国から高い関心が示されていた。

規格化の流れを受けて、日本下水道協会は今月9日に、TC224下水道国内対策委員会の元にワーキンググループを設置し、今後の対応を議論している。

エアレーション

弥生

3月を迎えました。古来、日本では弥生と呼ばれています。その語源は、「いやおい」すなわち、いよいよ盛んに生い茂る様を表す言葉からだそうで、春の営みへと自然界が向かっていくこの時季ならではです。

弥生と言えば、皆さま、何を連想しますか？ 私は、まず卒業式を連想します。自分自身の卒業式で忘れられないのは、中学校と大学の卒業式です。いずれも後輩男女から盛大に祝ってもらったことが強い印象となっています。

では、高校卒業はと言うと、私は私立の大学付属高校卒で、ほとんどの同級生が進学するし、男子校もあって何か淡々という印象でした。違った印象を持つね。最近は、仕事関来賓として出席するなりました。涙なしシーンを拝見する感動しながら、いつ変なのだなとほっいます。

もう一つ連想するさか趣味的になりダイヤ改正です。